今から思えば本当はもっと早く来れば良かったかなと思います。でも子供がちっちゃかったしね。妻のお腹も大きくなっていて、子どもが4人いたからね。だから置いていく訳にはいかないって思ってたんです。Kさんは「家族を連れてみんな行け」って言っていました。でも私は家族を連れて行くのは不安でした。きっと大変な思いをすると思って、ひとりで来ることにしたんです。

種ものの会社は日本に来る前にドイツ人の会社に売却しました。

**――日本に来たのはいつでしたか？**

日本に来たのは1988年5月11日です。当時、日本に来るのはなかなか大変でした。領事館で2千ドル積み立てないとダメなんです。それと、私は商売をやっていたから、「決算書も持って来い」って言われました。それまでちゃんと真面目に働いてたし、お金も持っていたので、私はその厳しい条件の中で来ることができました。

最初は日本がどんな状況かちょっと勉強しに来たんです。ところがそうこうするうちに1990年以降、たくさんブラジル人が日本に来ましたよね。90、91年は、毎日毎日、日本に来ていました。その様子を見て日本の中でもなんか商売できるんじゃないかと思って、今の商売を始めました。

**――その仕事熱心な気持ちはどこから生まれてくるのですか？**

やっぱりね、仕事が楽しいんですね。いつも笑顔で楽しく仕事をやれば疲れない。人生はね、辛いこともあるけど、楽しく生きていかないとね。楽しくやっていると、きっといいことがあるんですよ。一生懸命がんばっていたら、必ず誰かが見てくれています。一度しかない人生だからね。それをうまく利用するかしないかだね。

経営するブラジルスーパーマーケット「セルヴィツー」で接客中

**――家族はいつごろ来日されたんですか？**

私の妻は日系人なんだけど、最近来ました。何回も妻を連れに行ったけど、「ブラジルがいいから行かない」って言われてたの。子どもは10数年前に来ました。

## 日本で一番苦労したこと

**――日本で一番苦労したことはなんですか？**

今でも忘れないけど、リーマン・ショック（※4）のときですね。私は商品を移動販売やレストランなど約500店舗に卸していました。でもリーマン・ショックになって、倒産が相次ぎました。みんな銀行からお金を借りていて、返せなくなったり、逃げたりした人もいました。私もそうだったから、そのときは逃げたかったですよ。でも家族のこととか、お客さんのこととか、責任があるし、いろいろ考えたら逃げるわけにはいかない。正直言って、もうみんな放ったらかしてブラジルに帰りたいと思っていました。でも、そういうことしたら、どうせブラジルに行ったってうまくいかないんですよ。

**――苦労しながらもご商売を続けられるのはなぜでしょうか？**

そもそもブラジル人のためのお店なの。ブラジル人のお客さんがいての私だったんだからね。銀行さんも応援してくれたし、みなさんも応援してくれたから、今日があります。支えられて今まで生きていますね。

**――増子さんのお知り合いもブラジルへ帰りましたか？**

たくさん帰ってしまいました。（※5）今また若い人は戻ってきているけど、知り合いの中には引退する年齢の人が多いからね。その人たちは来たくても来られませんでした。ただ、ブラジルから私に電話がありますよ。「仕事ないか」って。掃除でもなんでもしたい、来たいって相談もたくさんあります。来たがってる人はたくさんいるんですよ。

## 被災地へ肉1トン

**――2011年の東日本大震災のあと、被災地支援に行かれたんですね。福島県は増子さんのお父様のふるさとだそうですね。**

そうそう。福島県の「ビッグパレットふくしま」っていう大きな施設に行きました。郡山市の中で一番大きな施設だったよ。日本人がほとんどで、外国人もいたけど、少なかった。

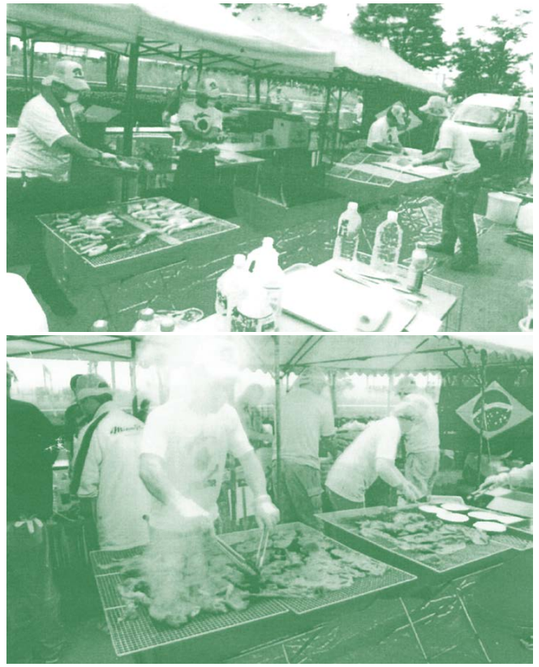
私のいとこから、炊き出しは来るんだけど、あんまりたくさんは来ないんだって聞いたんですよ。市の職員がおにぎりやパンを配ってくれるんだけど、温かいものが全然ないみたいで。郡山市は爆発した福島第2原発から50キロメートル圏内の地点だからみんな怖くて、他の所から支援に来ても避けてしまうんだって。みんな気仙沼とかの方に行っちゃって、郡山市には来ないから困ってるって。だから私はあえてそこを選んだんですよ。親父のふるさとである福島を。お肉を1トン持って行きました。でも一日でなくなっちゃったよ。

**――皆さんの反応はいかがでしたか？**

ブラジル風の焼肉、シュラスコをみんな何回もおかわりするんですよ。それが印象に残りました。おいしいおいしいって言ってくれて、「こんなおいしいもの食べたことない」って、みんな何回も取りに来ましたね。よっぽどお肉が食べたかったんじゃないかな。炭焼きの肉はおいしいからね。

すごい行列でしたね。施設にいる2500人が来ました。すごい行列行列。みんな箱を持ってきて、その箱にいっぱい、山盛りに持っていきました。足が悪くて取りに来られない人もいるから、みんな箱を持ってきて、箱にいーっぱい肉を詰めて持っていきましたね。

増子さんが主催したイベント。2008年上半期は、日伯移民百周年記念事業があちこちで行われていましたが、秋におこったリーマン・ショックで状況が一変しました


昼食の炊き出しを準備中。炭火で肉、ソーセージ、アマゾンの魚などを焼きました

## 避難所でブラジル料理を

### 父の古里 福島で恩返し

### 中区の日系2世・増子さんら現地へ出発

福島県がルーツの日系ブラジル二世で浜松市中区の食品会社経営、増子利栄さん(56)ら市内の日系人十人が十五日、ビッグパレットふくしま（福島県郡山市）で避難生活を送る住民にブラジル料理を振る舞うため、現地に出発した。

「こういう時こそ、助けにいかなきゃ」と増子さん。

約十年前にになった父の利秋さんは、福島県本宮市の出身だ。自らの会社で製造しているパン、シュラスコ用の肉二百キロ、一千個と、ブラジル料理などを車に積み込んで出発した。名古屋市や群馬、神奈川県の日系人約四十人も、現地で合流するという。

一行は、福島県内で最も多くの住民が身を寄せるビッグパレットふくしまで十七日、千二百人分の昼食を炊き出すことにしている。

「多くの日系ブラジル人が日本に受け入れられ、幸せになった。父の故郷でもある。いまこそ恩返ししたい」という増子さんは、二十日まで南相馬市などで、がれきの撤去も手伝うことにしている。

（勝間田秀樹）

ブラジル料理シュラスコ用の肉を車に積み込む日系の仲間たち＝浜松市中区で

中日新聞2011年5月16日掲載（中日新聞社電子メディア局許諾済み　許諾番号2018011212050 6）